

タイトル:平成 29(2017)年度 研究セミナー(第 18 回)

日程:平成 29 年 12 月 16 日(土)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「マムルーク朝末期社会と有力官僚

— 同時代ウラマーの描くザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒル像」

太田(塚田)絵里奈(慶應義塾大学文学部講師)

今回のセミナーに応募したのは、数年間執筆を中断したままになっていた博士論文を完成させたいという思いからだ。セミナーを修了した今、自身の発表機会以上に一時間にわたるご意見、アドバイスをいただいたことが大きな意味を持ったと実感している。通常、学会での発表時間はより短く、10 分程度の質疑応答が細かな点の確認で終わることもある。また雑誌論文に対しても、必ずしも具体的なフィードバックをいただけるとは限らない。それに対して今回のセミナーは、事前に博士論文全体の構成を提出し、その一部を発表する形式であったため、先生方が応募書類に目を通し、論の展開を踏まえたうえで、作品としてどのように改善すべきかを指摘してくださる、非常に贅沢かつ貴重な機会であった。

自身の博士論文についていえば、手元にある素材を最終的にどのように提示、組み立てていくかという全体的な論の構成を検討する段階にあった。事例研究は、興味深い考察対象が見つかったとしても、それが全体の歴史像をいかに書き換えていくかという問題を常に考えなければならない。今回の発表では、有力官僚ザイン・アッ=ディーンを通じ、どのようなマムルーク朝社会像が見えるかをより強調すべきであったと反省している。

他分野の受講生のプレゼンテーションも、その内容がそれぞれ重要な示唆に富んでいたのみならず、それらの魅力的な素材をどう提示するかを考える上で非常に勉強になった。そして、仮に研究に長所と短所があるならば、それを先生方がどのように生かし、修正されるのかを、自分のアイディアに照らして聞かせていただいた。また、「私の博士論文」での岩本佳子さんのヴィヴィッドな経験談には大いに勇気づけられた。博士論文すら一部に位置付けられるような、大きな文脈を意識すること、正でも負でも、研究上の経験は無駄にならないというお話は、今後の研究生活に向け大きなモチベーションとなった。

発表、質疑応答、先生方、他分野の研究者の方々との意見交換を通じ、本当に充実した二日間を過ごさせていただいた。2014 年にバイルートでの若手研究者報告会に参加した際にも感じたことであるが、プログラムのすべてが「若手研究者養成」という教育的なご配慮から綿密に設計されていた。大学で学生に助言する機会も増えてきたが、まさに今回自分がしていただいたことを後輩たちにも実践したいと思う。セミナーに携わってくださった先生方、事務局の皆様にご心から御礼を申し上げます。